

# 教職大学院 Newsletter No. 32

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2011.05.21

## 福井大学教職大学院に思う

福井市教育委員会教育長 内田 高義

平成18年12月の教育基本法の改正に始まった教育改革は、今年度からの小学校新学習指導要領の実施によって、さらに具体的に実践に結びついていくこととなります。学校教育に対する社会の要請や期待が高まる中、教員一人一人の指導力の向上や、組織としての学校の指導体制の見直しを図っていくことは不可欠であり、そうした意味からも教職大学院が果たす役割は、ますます重要になってきています。

福井大学教職大学院はこの4月に開設4年目を迎え、これまで多くの先生方が実践研究に取り組んできました。勤務校の校務だけでも多忙を極めている中で、子どもたちのために自ら学びを求めて教職大学院で研鑽を積む熱意は、全国最上位の学力・体力を誇る福井の子どもたちに、福井の教員の力が大きく影響している証しであるといえるでしょう。こうした高い志を持つ先生方を少しでも支えることができれば、福井市では平成21年3月に「福井市教育支援プラン」を策定しました。子どもたちの学ぶ意欲の向上、学校不適應問題の解決、特別支援教育体制の充実など教職大学院でも取り組んでいる大きな教育課題に対し、子どもたちや教員、学校を支え、家庭、地域、社会の教育力を高めるために、今、必要と考える支援の具体策をまとめたものです。この支援策35プランの中に「福井大学教職大学院と連携した学校及び教員のレベルアップ」を掲げています。これからの学校づくりや授業改革に向け、教職大学院との連携によって、先進的な研究成果を学びながら実践研究を進め

ていくことを提唱するものです。このプランに基づいて、今年度から福井市の受講者に対する授業料等の補助を行うことになりました。経済的負担を軽減することによって、受講を希望する教員の増加につながればと考えています。

これまで教職大学院で学ばれた先生方からは、大学院スタッフや院生、そして全国の先生方と協働研究できる場を得られたこと、自分のこれまでの実践を省察し、新たな向上を目指す意欲を生む機会となったことなどが報告されています。また、勤務校においても、大学院スタッフの方からの指導助言の機会を得て、学校全体の研究が活性化し、授業改革や研究体制の充実の起爆剤となったとの声も聞いています。福井市では小中連携、地域連携の取組として平成17年度から中学校区教育を行っていますが、教職大学院の拠点となった学校や教職大学院で学ばれた先生方が、中学校区教育を通してその輪を広げ、福井全体の教育力の向上と子どもたちのさらなるレベルアップにつながっていけばと考えています。

このように福井市としても、福井大学教職大学院にかける期待は大きく、そのためにできる限りの支援をしていきたいと思っています。今年度、受講されている先生方も、自分の力量を磨くとともに、勤務校はもちろんのこと福井全体の教育の充実にも貢献していただきますよう、よろしくお祈いします。

*Make it Public*

*Critique it*

*Pass it on*

*Built upon it*

*Ann Lieberman, 2005.03*

### 内容

- 福井大学教職大学院に思う (1)
- 4月合同カンファレンスを終えて (2)
- Staff紹介 (4) 院生紹介 (5)
- 拠点校だより (9)
- 教師教育ネットワーク・交流のひろば (13)
- フィンランド視察を終えて (15)
- 研究集会案内 (19)
- 6月ラウンドテーブル速報 (20)

# 4月の合同カンファレンスを終えて

4月23～24日（予備日29～30日）に今年度最初の合同カンファレンスが行われました。「実践記録を読む・書く」ことの意味について基調報告から始まり、グループに分かれて各自のこれまでの歩みについて紹介し、修了生の長期実践報告を読んだ感想や自分自身の実践を語り合うセッションに取り組みました。今回は2人の院生の感想を紹介します。

スクールリーダー養成コース1年／嶺南東養護学校

伊藤 ゆかり

今年4月、教職大学院の一学生として、また養護学校の一教員として、いよいよ二足のわらじを履くことになった。不安と期待が交錯し、コラボレーションルームへの一步を踏み出したところ、右も左も分からない私をも包み込むような活気と暖かさを感じた。それは、この場に一步を踏み出した誰をも、協働の仲間の一員として認め合うような幅広い会話があちこちで聴けたことと、ストレートマスターの先生方の明るい笑い声を耳にしたからであろう。コラボレーションの会場を埋め尽くす大学及び参加された先生方の何気ない言葉には、自信と活気があふれ、目の前の子供について必死で考えておられる真摯な取り組みと、現場で悩みながら乗り越えていこうとするエネルギーを感じることができた。

1日目の午前中は3つの種を中心にちょっと長めの自己紹介を行った。

M2の先生方からは勤務校での実践を聞かせてもらい、なるほどと頷いたり、そうそうそこは校種が違えども共感できると納得したり、なるほどそんなこともあるのかと驚いたりした。

ストレートマスターの先生方からは、学生時代から今の自分についての紹介があった。ある方は、学生時代からボランティアとして児童相談所や不登校支援に

携わった活動を通して知った現実から課題を見つけ、それを変えるためにはどうすればよいか考えておられ、またある方は、ライフパートナーとして不登校児童の生活支援や学習支援を行う中で、学校でテストが受けられるように、児童の好きな絵本やキャラクターから自作のプリントを作っておられた。こんな風に目の前の子供に真摯に実践をされた彼らに、25年前の自分を重ねて聴いていた。自分のやっていることに納得がいくまでとことん追求していく、その若さと行動力が輝かしくかつうらやましく思った。

それから「実践記録を語る・聴く・書く・読む」についての話があり、意識せずに当たり前に行ってきたことについて、改めて実践を語ることや聴くことなどの意味付けを聞いたことは、今までの自分の「こうに違いない」と結論付けてしまう一人よがりの考えを整理できたように思う。

その日の午後と2日目の一日かけて、長期実践記録を読むについて取り組んだ。実践者の展開について読み取るだけでなく、実践者そのものの成長を支える要因と課題、そこから今の自分の実践についても触れるという作業に入った。今までも実践記録を読むチャンスはあったが、一人の実践を2時間以上かけて深く読み、それを自分の言葉で語ることがなかったので新鮮な活動であった。人の実践をまとめることは、自分がその人の実践にどれだけ入り込めるか、もし入り込んだとして自分はその中でどんな役割を担うことができるか、実践者と距離を置いたとき、その実践と自分の実践との共通点は何か、また違いは何か、を書いていくことで整理することができた。

その後のクロスセッションでは、書いたことをただ読むのではなく、自分の考えをまとめて周りの方に分かってもらえるように語り、それに対して幅広く意見を聴くことで、自分の考えを新しい方向に向けることができた。特に私のグループでは、「授業をした後の研究会」について話題提供があった。机配置が「コ」



「ロ」の形では意見の深まりがないこと、「研究会」という名前を「学習会」に変えること、「授業者に対しては最大の敬意を払って参観させていただく」こと、「参観の意味は児童の変化を客観的に見て、自分の言葉でそれを語るためのトレーニングと思う」ことなど意見が出て盛り上がった。「指導案の書き方についてではなく、見てほしい児童や観点を指導案に付け、その部分について事後の話合いが深まるといいのでは」と言う意見もあり納得することができた。グ

ループのメンバーは年齢層、校種、取り組みが違うが、お互いを高めようという意欲と高い方向に向けた共通の太いベクトルを感じた。実践の悩みからでる言葉は重く、励ましてなく実践への客観的な意見は自分の活力となり、力強い応援団が後ろにいると思え、何となく明日からもがんばれるような気がした貴重な2日間であった。

### 教職専門性開発コース1年／至民中学校インターン

## 北島 正也

今回、合同カンファレンスに初めて参加しました。私が参加したのが予備日程だったこともあり、ストレートマスターの院生は同じテーブルに誰もおらず、大変不安な中1日目の幕が明けました。しかし、だからこそ見えてきた学校という組織自体の問題点と課題を考えることができたように感じます。ここではカンファレンスを踏まえて考えたことを書くことで今回の振り返りとしてしたいと思います。



スクールリーダーの先生方の語りを聴いて考えたのが、「教育はなかなか変えることができないのか?」ということについてでした。研究主任や教務主任という立場におかれながらも、他の先生方のこれまで培ってきた教育観を簡単に変えることはできず、学校を一つの組織としてなかなか変革し得ない、ということは、ある意味学校教育の現実をつきつけられているような気がしてなりません。私は今至民中でインターシップをしていて、至民中のよさを語ったとしても、「それは至民だからできる。うちの学校ではそんなことはできない。」ということを度々言われますし、今回も何名かの先生方に指摘されました。しかし、どうしてもこの意見が自分の腑に落ちてきませんでした。心のどこかで、「決して至民中は特別ではなく、これからの学校づくりの先駆けになる学校なのだ。」という思いがありました。弱冠22歳の若造で、至民中の一員となってまだ日が経っていませんが、どうすれば至民中を学校改革の起爆剤として「売って」いけるのだろうか、と考えていました。

しい時代の学校として4年目を歩み始めています。先生方は皆日々の実践を大切にしており、授業を参観させて頂いてはっとさせられることも度々ありました。こうしたことを踏まえてもう一度はじめの問いに立ちかえてみると、決して学校自体を変えることは不可能ではないと確信しています。たとえ何年かかろうが、必ず新しい学校に変革するという意志をもって変革を訴えていくことが大切だと感じました。その点において、現職のスクールリーダーの先生方の「学校を変えたい」という熱い思いを聴くと、自分が現場に出てからどんな教員を目指していこうかということを再考するきっかけとなったと言えます。

至民中も福井市の公立中学校の一つであることには変わりはありません。もともとはいわゆる旧態依然とした学校であったことを本校の大橋巖教諭の実践記録を読む中で知りましたし、さらに氏の記録を読みながら、新至民中について何年にもわたって計画されてきたという、本校の全体研究会における渡辺元教育長のお話を思い出しました。そして現在、至民中学校は新

数年もすれば、私たちが現場の教員の一員として、少しずつ学校運営に携わっていくこととなります。このようなカンファレンスの場で語ったことや現場の先生から聴いた語りを糧に、大袈裟であっても「自分たちから学校を変える雰囲気をつくる」という強い意志をもっていきたいと考えています。そのためにも、現在のインターン校である「新しい」至民中でひとつでも多くのことを吸収していきたいです。

# Staff 紹介

今年度から新しく加わった教職大学院のスタッフを紹介します。今号からは、協働研究員として関わる先生方の歩みや思いを語っていただきます。

## 松友 一雄 まつとも かずお

本年度から、教職大学院の協働研究員を兼任することになりました言語教育講座の松友一雄です。兼任する経緯となったのは、本年度から拠点校になった福井市立中藤小学校と平成17年度から協同研究を進めてきたからです。私の研究の中で、小中学校との協同研究は非常に重要なものであり、その一つとして中藤小学校と歩んできたこの6年間も多くの成果を得ることができました。その中藤小学校が校舎の新設移転やそれに伴う教科担任制の導入などに取り組んでいくために本学教職大学院の拠点校になったことは、新しい中藤小学校を考えていく大きな一歩となったのではないかと考えています。

私はこの中藤小学校のように「校内研修のコンサルティング」を行うことが仕事の大半を占めており、自己紹介というと国語教育に関する研究よりもこちらの取り組みのことをお話しする方が適しているように思うのですが、一方でこれは私の密やかな楽しみとでもいべきものでして、時間が空いているとどこかの教室に行っては子どもたちの様子を眺めているのも、先生方と明日の授業を夜な夜な作っているのも、何かしら趣味に近い感覚を持っています。

私は、基本的にこういった仕事をお引き受けする際には、3年間という期間を提示します。(いろいろな都合の中で2年になる場合も多いのですが)それは、学習者の言語能力が育ってくるのに少なくとも1年にかかること、先生方の観察眼が形成され、自らの授業やクラス作りに「主体的」に向き合えるように意識が変容してくるのに1年以上かかること、そして、校内の研修体制が「協働性」を持ってシステム化されてくるのに同じく1年以上かかるからです。そこから本格的に授業研究が始まるのですから、どうしても3年にかかるなあといつも思うのです。性急に進めすぎると先生方に負担が掛かり、「主体性」がそげ落ちていくからです。

最初の点に関していえば、現在コンサルティングしている学校の多くは「教科を超えた言語力の育成」を

テーマに言語活動を中心とした授業へと向かって研修を行っていますが、学習者の言語能力が育っていない状況で授業だけを活動型にしても授業は全く成立しま

せん。これは、思い起こせば中藤小学校に初めて入った時の状況と同じです。当時は「伝え合う力」の育成をスローガンに、「確かな学力の育成事業」を引き受けていましたので、授業の中には「話し合い」の場面が多く取り入れられていました。しかし、学習者の言語能力が育っていないために、授業が空回りしていました。

学習者の言語能力の実態を一緒に観察し、一緒に育てましょう、そのための観点と方法を提案するのが私の仕事です。単語で発話する状況では話し合いなどできません。どうすれば文や文章で発話ができるようになるのか、話型や接続語をどのような順序で習得させるべきなのか、学習者の「聞く力」を育成するための方法や学習者同士が「つながり合う力」を育成する方法など、逐一そのクラスごとに、その学習者ごとに育成の方法を提案します。コミュニケーション能力などは特に多様なコミュニケーション状況の中で説明や報告を行ったり話し合ったりすることが重要ですから、育成するフィールドは授業だけではなく、部活動や学校行事、朝の会や学年集会、校内掲示や校内キャンペーンなど多様な場で学習者の言語力育成に取り組めます。ですから、教員全員で、地域の人や保護者全員で学習者を育てることになるわけです。

3つ目の点に関していえば、中藤小学校では、学年団が協同で授業を作ることから始まり、先生が入れ替わって授業を行い、自分のクラスの後ろから自分のクラスを見ることに取り組んでみたがこれが結構面白く、現在入っている大阪高槻芝生小学校では、学習者が教室のうしろで参観して感想を述べ合う取り組みも



進めています。「協働性」のある研修体制は「一緒に育てている」という意識と「昨年の学習者を受け継いで育てている」という意識が必要となります。長期的な展望に立って学習者の育ちを見とるための枠組みを提案していくことも私の仕事です。

金沢市立木曳野小学校は今年で2年目になりますが、入ってすぐに隣の小学校の校長先生に招かれて鞍月小学校にも入ることになりました。両校は研究授業も協同で行うことが多く、講演や研修なども一緒に行うことが多いです。妙な緊張感とライバル意識の中で面白い協働性が育まれています。新しく入った南小立野小学校にも仲間に入ってもらおうと目論んでいます。元中藤小学校の教頭であった室校長とは永平寺町

上志比小学校で3年協同研究を進めました。中藤で開発した「対話型学習」は上志比小学校でより深まりを見たように思います。本年度からは松岡小学校、志比北小学校と三校で「対話型学習」に取り組みます。学校内での協働性から地域での協働性へと広がりを持つことで一緒に学習者の言語力を育成する仲間が増えていくように思います。

私は国語科教育の研究者であり、言語能力の形成過程を解明することを目指していますが、一方でたくさん仲間たちとたくさんの子どものことばの力を育てています。

## 院 生 紹 介

前号から引き続き、今年度教職開発専門性コースに入学した6名の院生の皆さんから自己紹介をしてもらいます。次号からは、スクールリーダー養成コースの院生紹介も始まります。

### 辻本 友舞 つじもと ゆまい

小学生時代からテニスに明け暮れる毎日で、青春時代は全てテニスに打ち込んでいました。テニスを通して、礼儀、挨拶、仲間の大切さ、協力し合って勝つ喜び、負けた悔しさから立ち向かっていく強い心などを学び得ることができました。『保健体育の教師になって部活動をもちたい』という思いから、筑波大学体育専門学群に入学し体育分野を学んできたのですが、卒業後に講師として赴任された場所は、福井南養護学校。右も左も分からない毎日で、自閉症って何？なぜ固まるの？私は何をしたらいいのだろう？と自問自答している日々でした。4年間、臨時任用講師として働かせていただいたのですが、子どもたちから学ぶものは多く、私の視野は広がりました。素直で純粋な心を持っている子どもたちと接していく上で、私は特別支援学校も楽しい、何より子どもが可愛い、好きだと思えるようになりました。成長していく過程を3年間というスパンで連続して見られたことが本当に嬉しく、子どもの成長ってすごい！と思いました。そんな中、「あれ？私は一体何の先生になりたいのだろう？体育？特別支援？」と迷いだしました。このままでは、いけない。自分自身を見詰め直そう。考える力を身につけなければいけない。そのためには、何かを変えな

ければ！と思い、実践を通して学び合える教職大学院に入学しました。特別支援学校でしか働いたことがなかった私は、新たな環境へと一歩踏み出し、現在は鯖江高等学校にて保健体育を学ばせていただいています。様々な経験を積み、よりよい教師になる第1歩だと思い、前進していきたいと思っています。



講師経験から、子どもの可能性は無限大だと気付きました。毎日に変化していて、そのために何とかしようと手助けをするのが教師としての役目だと感じています。どんな子どもでも、やりたい伸びたいという向上心があるので、スパルタではなく、やる気を引き出す教材を作りたいと思っています。「楽しい授業」とは何か？模索中の私ですが、焦らず、比べず、諦めず、試行錯誤しながら頑張りたいと思っています。どうぞよろしく願います。

## 永田 恭子      ながた きょうこ

こんにちは。今年度、教職大学院教職開発専攻に入学した永田恭子です。専門教科は音楽です。4月から、丸岡南中学校でインターンシップをさせていただいております。丸岡南中学校は教科センター方式、スクエア制など様々な特色のある学校で、初めは戸惑いを隠せませんでした。しかし、先生方も生徒たちも明るく温かな雰囲気のある学校で、毎日楽しく学校へ向かっています。ランチルームで全生徒・全職員と一緒に食べる給食はおいしい上に、2種類の給食から選ぶのも毎日の楽しみのひとつです。魅力たっぷりの丸岡南中学校でのインターンも、あっという間に1ヶ月が過ぎてしまいました。

音楽という教科は、ある決められた答えのない、個性・個々の感受・自己表現を大切にされた教科です。音楽自体は実態のないものなので、ぼんやりとしたイメージしか持てないかもしれませんが、同じ曲でも一人ひとりの個性や感じ方で様々な色に変わる、魅力的なものだと思っています。それを1つのやり方で押さえつけてしまう授業を実際に体験し、そのたびに「音楽はもっと楽しいものなのに」と感じていました。歌えばいい、演奏すればいいのではなく、その動作の先にある表現をもっと子どもたちに楽しんでほしいと思ったことが、音楽の教師を目指した大きな理由のひとつです。

学部生の頃は、専門教科の勉強だけでなく子どもたちと関わることを通して多くのことを学びました。しかし、それが学部3、4年の教育実習で十分活かすことができずでした。授業づくりに必死になり、子どもと深く関わることができず、学校現場だからこそ

学べる学校運営についても、ほとんど学ぶことができませんでした。1ヶ月と2週間というあまりに短い実習期間に不安を覚え、長期インターンシップのでき

る教職大学院で納得のいくまで学び、教師を目指すことに決めました。インターン始めてからやっと1ヶ月が過ぎたわけですが、学校に慣れてきたなど感じる程度で、学びたいことは山ほど、むしろ新しいことがたくさん見えてきて、増えたくらいです。その発見一つひとつが面白く感じ、日々が充実しているように思えます。

先日、初めての合同カンファレンスに参加しましたが、毎週行われる木曜カンファレンスと違い、現職の先生方と意見を交わしたり現場の声を聞いたりできる機会は大変貴重であると感じました。自分の抱いていた疑問やぶつかった問題も素直に話せるような温かい雰囲気の中で行われ、現場の先生ならではの意見やアドバイスがもらえました。一つひとつの活動において大きな収穫があるこの2年間を、どれだけ自分のものにしていけるのか、楽しみです。



## 中山 圭祐      なかやま けいすけ

こんにちは。今年度、福井大学の教職大学院教職専門性開発コースに入学した中山圭祐です。担当教科は理科です。4月から1年間、丸岡南中学校で長期インターンシップをさせていただくことになりました。

私は、福井大学の学部生だったころに附属中学校にて約1ヶ月の実習と、公立の小学校で2週間の教育実習を経験させていただきました。特に附属中学校の実習では、「楽しい理科の授業」をモットーに自分なりにいろいろと考えながらどのような授業構成にすると生徒は楽しく学ぶことができるのだろうと模索していました。しかし、教育実習で実際に生徒を相手に授業をすることが初めてだったので、教科書の内容や指導書に載っている内容に即した授業作りを行うことしか

できなかったというのが事実です。まずは基礎・基本をしっかりとして学んだ上での応用であり、これから徐々に取り組んでいけば良いとアドバイスをいただきました。

私が理想とする授業作りに関してはまだまだ研究が進んでおらず、この点についてはこの教職大学院でじっくりと1年間かけて考え、取り組んでいこうと思っています。また、上記した2つの教育実習の期間が非常に短く、生徒・児童との関わりの点に関しては



あまり学ぶことができませんでした。この1年間のインターンシップでは、じっくりと生徒と関わり信頼関係を築いていくことができると考えています。生徒と教師の関係が授業はもちろんだが、学校生活全般に及ぼす影響は非常に大きいと思うので、併せて研究に取り組んでいきたいと考えています。

現在、インターンシップが始まって1ヶ月が経ちました。職員会議や学年部会での話し合いなど、教育実習では経験することがなかったことについても学ばせ

## 西 洋平 にし ようへい

はじめまして。今年度、教職大学院教職開発専攻に入学した西洋平です。担当教科は数学で、これから1年間の長期インターンシップは福井大学教育地域科学部附属中学校でお世話になります。

私が教師を目指し出したのは、中学校時代のある先生がきっかけでした。その先生は、一言で言うなら「変わった人」。赴任してきて最初の授業を黄金律の話や延々として一時間つぶしてしまったり、中庭で大根や苜を栽培してみたり、間違いを減らすためだと言って授業中は消しゴムを使うなどと言ってみたりなど、今までに出会ったことのない先生でした。しかし、生徒との関わりにおいては常に全力で、そんな真剣に向き合ってくれる先生に魅かれていき、次第にあんな先生になりたいと思うようになりました。

学部では、探求ネットワークの活動で、どうすれば活動に興味を持たせることができるか、ある行動についてどうしてそういう行動をしたのかという視点を大切に、4年間全力で子どもたちと関わってきました。また、数学に関しては、生徒に興味を持たせるような教具をたくさん学び、4年次の湊小学校での実習ではタイルを用いて筆算の授業を行うなどの実践もしました。しかしながら、探求ネットワークは1年間をいう

## 平野 貴大 ひらの たかひろ

今年の4月から福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻のストレートマスターとして入学しました平野貴大です。数学の教員を目指しており、福井市至民中学校でインターンシップを行っています。至民中学校でのインターンシップは自分からの希望だったので、希望した学校に行けたこともあり、毎日充実した日々を送っています。

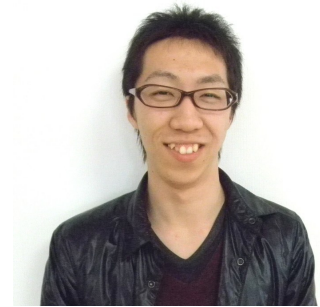
私は学部生のとき、3年次に福井大学附属中学校で、4年次には福井市円山小学校で教育実習をさせて

いただいています。この1ヶ月間は右も左もわからない状況の中で日々精一杯、自分にできる範囲で様々な仕事に取り組んできました。今では少し教師の仕事を理解し、4月のはじめに比べると学校生活に慣れてきたので、スムーズに動けるようになったと感じています。これからは、実際に私が授業を行ったり担任の仕事を行ったりと、より本格的に実習が始まっていくのでより一層頑張っていきたいと思います。これから2年間、どうぞよろしくお願いいたします。

長いスパンで関わることは出来ましたが、月に1、2回程度しか活動がなく、ある活動からの直接的な成長を見ることはなかなか出来ませんでした。また、教育実習に関しては、3年次に4週間、4年次に2週間とスパンが短く、授業実践も十分に行えたとは言えませんでした。

この教職大学院では、週3回、1年間という長いスパンで生徒と関わる事が出来ます。また、附属中学校のメンターの先生は「やりたかったらたくさん授業してくれればいいよ」とおっしゃってくださっているので、授業実践の機会もたくさん頂けそうです。木曜カンファレンスでの話でも出たことなのですが、いい意味で「学生だから」と思い、失敗を恐れずにどんどんいろいろなことにチャレンジしていきたいと思えます。

これから2年間よろしくお願いいたします。



いただきました。3年次、教育実習前に大学で受けた講義の中に、数学の意味理解を問う講義がありました。その講義を受けた後、自分が今まで受けてきた数学の授業を振り返ってみたときに、数学的事実を突き付

けられるだけの非常に淡白で面白みに欠ける授業が多かったような気がしました。そこで、3年次の教育実習では意味理解を問うような授業実践を行いました。しかし、その授業はうまくいきませんでした。なぜかという、授業に向けての準備に追われるばかりで目の前の子どもたちの姿に全く目を向けられていなかったからだと思います。今日の前にいる子どもたちの姿に合った授業づくりということの大切さを実感しました。4年次の教育実習では少しでも多く子どもたちとかかわりたいと思って臨みました。すると、突然担任の先生から任された授業でも子どもたちが授業を作ってくれ、ほとんど準備ができていなかったにも関わらず子どもの意見も拾いながらの授業ができました。私は2回の教育実習で、子どもの姿が見えているかどうかということがとても大切だと知りました。ま

## 北條 哲理 ほうじょう あきのり

はじめまして。今年度教職大学院教職専門性開発コースに入学しました北條哲理です。この4月から、福井大学教育地域科学部附属特別支援学校の高等部で長期インターンシップをさせていただくことになりました。

私は学部時代、福井大学の探求ネットワークや、ライフパートナー、その他のボランティアで色々な障害を持った子どもたちと係わる機会がありました。障害を持った子どもたちと係わる中で、少し前までは上手く出来なかったことが出来たり、人との係わりが苦手な子どもが、自分から係わる事が出来たりと、子どもたちの成長を見ることができ、とてもうれしく感じていました。しかし、子どもたちの小さな成長を見るには、子どもたちのことをしっかりと理解し、その上で子どもの変化に気づけるように自分自身が成長していかななくてはならないのだと学びました。こういった活動の中で私は特別支援教育に興味を持ち、教師になりたいと思いました。その後、特別支援教材研究の授業、特別支援学校教育実習などの実践的な取り組みを通して、様々な学年、障害の子どもたちと係わってきました。しかし、ほとんどが、長いスパンで子どもの成長を考えるのではなく、短期的な係わりでした。

特別支援教育実習では、2週間という期間毎日子どもたちと係わり、先生方から沢山の助言やご指導をいただきながら色々な事を学ぶことができました。実習の中で、時には子どもの出来る可能性を信じて、しっかりと待ってみる事、しかし必要な時にはしっかりと手を貸してあげることが大切だと先生から指摘され、意識するようになりました。しかし、それぞれの

た、子どもと多くかかわることで子どもとかかわることの楽しさを改めて感じる事ができました。そのなかで、自分の中の教師になりたいという思いがより強くなり、教職大学院の長期インターンシップに魅力を感じて進学を決意しました。

長期インターンシップでは、子どもとのかかわりはもちろんのこと、自分自身の授業力も磨きたいと考えています。至民中学校は教科センター方式や異学年クラスター制など、非常に先進的な教育を行っている学校です。授業を参観させていただいても自分が中学校時代に受けてきた授業との違いに驚くことばかりです。至民中学校の授業は普通の学校ではできないと言う人がいますが、至民中学校で学んだことが他の学校へ行っても活かせるような実践をしていきたいと思っています。

子どもの出来る可能性を信じて待つには、しっかりとその子どものことを理解しなくてはなりません。同時に周りの子どもたちのこ

とも理解した上で、今その子どもが何をしようとしているのか、自分ができる支援があるとすれば何かをしっかりと把握する必要があるのだと感じさせられました。これは私には簡単なことではありませんでした。また、2週間という期間では、子どもたちが私のことを認識し始め、色々な変化や様子を見せてくれるようになり、また私自身も、少しずつ子どもたちのことを理解し始めた時点で実習が終わってしまいました。そこで私は、特別支援教育について、もっと実践経験をしたいと思い、長期インターンシップを行うことができる教職大学院へ進学を決意しました。

今後2年間、長期インターンシップを通して、子どもたちのことをしっかりと理解し、全体を把握しながら自分の身の置き方を考えていきたいと思っています。また、それらの実践を省察するにあたり先生方のご指導、助言をいただきながら自分自身を教師としても人としても成長させていきたいと思っています。これからよろしくお願ひいたします。





# 拠点校 だより

## 福井大学地域教育科学部附属小学校

スクールリーダー養成コース1年

浅野 尚美

本校は、3つの使命「義務教育学校としての使命」「教育実習校としての使命」「研究実践校としての使命」を担っています。特に、「教育実習校」「研究実践校」としての使命があるために、他校よりも忙しく、大変だと思われています。また、「附属だからできること」と特別視されがちです。本校のすばらしいところを紹介することで、少しでも、本校の教育活動を理解していただき、身近に感じていただけたらと思います。

本校の子どもたちは、豊富な知識、旺盛な好奇心、意欲的な行動力を持っています。その反面、実体験が少なく知識偏重に陥っている子、興味のないものには無関心な子、さらに学習意欲が低く自分に自信を持っていない子などもいる多様な子どもたちの集団です。また、親や教師以外の大人や異年齢の子たちとの交流が少ないといった特徴も見られます。こうした実態を踏まえ、本校では、仲間とともに話し合う中で探究する場を設けたり、異学年で交流する中で協働して何かを成し遂げる活動を取り入れたりするなど、学習面だけでなく学校行事など学校生活全般において、「つながり合い」を大切に活動を取り入れています。それらの中で象徴的なものは、運動会です。

本校の運動会は、本校のメインであり、子どもたちが創り上げる運動会で、毎年、見事に成し遂げられます。学年種目、低・中・高学年種目、縦割り種目な



ど、競技種目を児童が企画運営したり、4年生以上は、係活動を自主的に行ったり、6年生は、応援合戦を創り上げたりしていきます。時間がかかっても、児童が自ら創り上げるところに、この運動会の重要な意味があります。運動会を創っていく過程は、子どもたちの企画力・段取り力・実行力や自主性をさらに大きく育てるチャンスでもあるのです。5年生には、6年生の色長や団長にあこがれを抱き、来年は自分がその役に携わりたいと考える子も現れます。本番当日を迎えるまで、どの色にも、いろいろなドラマが繰り広げられます。それが達成感や自信にもつながっていて、今後の彼らを支えることになるのです。

子どもたちは、いろいろな体験を何度もサイクルの





ように繰り返すことで成長していきます。1年生のときから、学年ごとに集会を開いたり、学団（低学年・中学年・高学年をそれぞれ「学団」と言う）活動を季節ごとに実施したりして、企画運営力を向上させる取り組みを行います。各学年での集会の成功体験や、下級生が上級生を見て学んだことが、次の活動への自信や意欲につながっていくのです。行事や学団活動などの全ての教育活動の中で、そのような経験を何度も繰り返してきています。このような経験を積んだ子どもたちで創られる運動会が、毎年、成功裏に終わらないはずがありません。この仕組みや伝統は、2～3年で積み上げられたものではありません。平成15年度より、「つながり合って育つ」研究をやってきたからこそ、成し得たことではないかと考えています。また、運動会を通して、子どもたちの成長だけでなく、教師も児童理解力、生徒指導力などの力量が大きく伸長します。

## 福井市至民中学校

充実・「新化！」する至民中学校を目指して ～理想の形 異学年クラスター制～

スクールリーダー養成コース1年

鈴木 三千弥

至民中学校の3本柱の一つ「異学年クラスター制」は、今年理想の形を迎えました。というのは、昨年度4つのクラスターだったものが、5つのクラスター（レッド、ブルー、イエロー、グリーン、パープル）となり、各クラスターは1、2、3学年それぞれ1クラスずつで構成されています。全クラスター教員を含め約100人の「小さな学校」です。

4月6日、入学式が終わり、2、3年生は新クラスが

その研究は、昨年度より、研究テーマ「協働して学びを深める授業をつくる」を設定し、「つながり合って育つ」姿が生まれる場として、授業に焦点を当て、その中の子どもの姿を、「協働」という視点から見出していくことにしました。本校の研究は、「省察的実践研究」という研究スタイルをとっています。低・中・高学年部会を軸に、授業で見られた子どもの姿を抛り所として授業研究を実施しています。校内授業研究会、2回の助言者協力者会、4回のバズセッションなどを通して、「見合う」「語り合う」「読み合う」ことを大事にして研究を進めています。＜授業の事前研究→授業公開→事後研究→次時の授業へ＞というサイクルを繰り返し、教科・学年を超えて互いに授業を見合い、授業研究を積み重ねながら、一人一人の教師の力量を高めていけると感じています。

また、本校の職員は、結束力ではどこの学校にも引けを取らない仲間です。明るく、和気あいあいとした楽しい職場です。授業を開き、心を開いて語り合うことができる仲間と共に、子どもたちだけでなく、教師も協働で研究を進めているのです。そんな仲間だからこそ、できる研究だと思っています。今年度も、温かい仲間と共に、着実な子どもたちの成長と教師の力量アップを目指してスタートしました。

今年度は12月2日に第37回教育研究集会が開催されます。その1時間の授業だけで、子どもたちの学びをすべてお伝えすることには限界がありますが、ぜひ、ご参観くださり、忌憚のないご意見、ご助言をいただければ幸いです。

発表されてクラスターでの生活が始まります。7日はクラスター長（3年）、副クラスター長（2年）を各クラスターごとに選挙などで選びます。そして4月26、27日に行われたクラスター研修（今年度は東日本大震災の影響で合宿を研修に変更）で親睦を深めたりクラスターでの1年間の生活を創り上げる準備を始めたりします。私が所属する英語エリアを中心としたパープルクラスターの2日間を紹介します。



1日目、クラスター長の挨拶でクラスター研修が始まりました。この2日間でどんなことをしたいのか、原稿を見ないで語ります。この方法も至民中学校が力を入れていることの一つです。書いた原稿をただ読むのではなく、聞いてくれる人に伝わるように「自分の言葉で語る」のです。

クラスター長の挨拶の後、すぐにプロジェクト活動が始まりました。プロジェクト活動とは、クラスターの中で、縦割りのグループを作り、クラスターでの生活全般を支えていく活動です。例えば、クラスター長を中心とした「クラスター委員会」、学習活動に関する「The Team Study」、毎日の給食や食に関することを考える「いただきマウス」など、活動内容もプロジェクト名も生徒たちが中心となって考え自治的活動を行っています。3年生がプロジェクトリーダーになってはいるものの、最初はなかなかスムーズに活動は進みません。それでも、少しずつ考えを出し合い、活動を通して親しくなりお互いを信頼してクラスターのために自分のプロジェクトは何をすべきか、何をしたらよいかを試行錯誤しながら進めていきます。午前中の最後に、クラスター全員が集まり、各プロジェクトの途中経過を報告しました。

午後の活動は「お弁当づくりの準備」です。今年度のパープルクラスターでは、食について考え、残食ゼロを続けることを目標の1つにしています。そこで、2日目の校外活動に持って行くお弁当をプロジェクトチーム

で考え、作り、食べる、という活動に取り組みました。この活動は我々教員にも経験はなく、至民中学校が大切にしている「前例はない」取り組みとなりました。決められた予算の中で弁当の品目、量、盛りつけ予定図、調理方法などすべて自分たちで決め、さあ、いよいよ買い出しに出発です。プロジェクトの代表が近くのスーパーへ行き、計算機片手に苦勞しながら買い物をしていきます。中には、調理方法や材料の切り方を直接店員さんに聞いている生徒もいます。「生きる力」が育っているなあと感じた一場面でした。

さあ、クラスター研修2日目は、いよいよ「お弁当づくり」のスタートです。キッチンスタジオ（調理室）と隣接する「しみんホール」で100人が1度に調理を始めました。生徒たちはお弁当づくりに「没頭」しています。物づくり、特に食べるものを作るというのはすばらしい体験だと改めて感じました。

今回は私が所属するパープルクラスターの研修を中心に紹介しましたが、他の4クラスターもそれぞれ工夫、趣向を凝らした活動で、生徒たち自身で自分のクラスターを創り上げるスタートを切りました。クラスター研修後、生徒たちは自分たちの研修がいかに楽しかったか語り合っていました。お互いを意識しながらよい意味での「競い合い」が見られました。詳しくは、ホームページに掲載してあるのでご覧ください。



## ストレートマスターと共に学ぶ

スクールリーダー養成コース1年

中谷 忠裕

教職専門性開発コースで学ぶ2人のストレートマスター（SM）が、月・水・金の3日間、本校で学んでいる。そのうち社会科専攻のSMが私の学級と授業を中心に、実習を行っている。4月は生徒の生活ぶりや教員の

授業を観察することが主となっているが、早朝の登校指導を行うなど積極的に生徒と関わろうとしている。給食もホームで生徒たちと一緒に食べ、生徒との関係をつくらうとしている姿に感心している。数週間の実習であれ

ば、授業づくりに終始し、生徒を理解するには至らないのであろうが、1年間という長いスパンであるため、生徒と関わりも増えてくる。教材研究をいかに深めても、納得できる授業は、ベテラン教員でもなかなかできるものではない。自分が描いた授業ができるためには、生徒理解が不可欠だ。生徒との関係をつくれるようになれば、生徒の活動に沿った授業づくりができてこよう。SMは、私の授業だけでなく、本校の他の教員の授業も自由に参観できるため、教科の壁を越えて生徒の学びを保障する授業づくりを考える機会を与えられている。

また、授業を常時SMが参観していることもあり、授業者は「これぞ問題解決型学習！」と意気込んで授業にのぞむ。授業者にとって、教材へのより深い理解と単元を通した授業づくりを意識させてくれるメリットがある。さらに、SMに授業を説明することは、自らの授業を振り返り省察することであり、授業実践の意味づけに

つながる。単元の展開が生徒の思考からは無理があり、反省させられることが多々あるだけではなく、SMの質問がヒントとなり、次の授業展開の構想につながることもある。

SMが週末に提出してくれる実習記録を、私は楽しみにしている。生徒同士の関係や授業での生徒のつぶやきなど、気づかない情報を寄せてもらっているからだ。授業を振り返ることにつながるだけではなく、学級経営を見直す機会を与えてもらっている。日頃、同僚と情報交換を行っているとはいえ、日常的な自身の指導を他者からの観察で振り返ることはなく、まさしく省察している日々である。

ストレートマスターに一方的に教え込む関係ではなく、互いに「語り」、「聴き」、「書く」行為を通して学んでいきたいと考えている。

## 福井精華学園 啓新高等学校

スクールリーダー養成コース1年

東 俊輝

啓新高校は、所在地（福井市文京4丁目15-1）が示すように、教職大学院のある福井大学文京キャンパスとは芦原街道を挟んで向かい側に隣接しており、福井の教育の場の中心に位置する私立の高等学校です。昭和37年4月福井精華女子学園（昭和2年9月創立）を母体として福井女子高等学校が開校。平成10年4月男女共学化に伴い、啓新高等学校となって新たにスタートし、今年で14年目（高校開学49年目）を迎えました。本校の建学精神である「真・善・美」「行学一路」に基づく個の完成を目指すためのキーワードを「可能性の挑戦」として掲げ、本年度も教職員一同、生徒のために情熱を持って教育活動に取り組んでいます。

今から7年前の平成16年に本校は、福井大学との連携協定を結び、翌年の平成17年4月より、学校長が教職大学院の前身の福井大学大学院 教育学研究科 学校改革実践研究コースに入学したのを機に、授業改革プロジェクトチームが編成されました。福井大学の先生方と本校の教員10名が月1回程度の全体会をもちながら、それぞれの科（普通科・情報商業科・生活文化科・調理科・福祉科）での授業改革の取り組みを行っていきました。その後、家庭科の坂本が校長に引き続き大学院で学び始めたことをきっかけに、主に家庭科でという方針になり、この一連の流れを通して、本校が教職大学院の拠点校になりました。その後、本

校からは平成21年度より毎年一人ずつ教職大学院に入学して学ばせて頂いています。

また平成21年度より本校では、授業研究に対する意識を学校全体に広げていくことを目的に、宮腰を中心とした有志が集い、授業研究会を立ち上げました。最初の1年目はまず、同年校長の発案でスタートした、全校のすべての授業をオープンにして教職員全員が他の教員による授業を自由に見学するというオープン授業が2週間にわたって行われました。これを利用して、研究会の中でも授業をお互いにメンバーの授業を見合って意見交換し、授業力向上を目指すということから始めました。しかし、なかなか他の教員の改善すべきポイントについては指摘しにくい雰囲気があり、かつ、いくら学科・教科の壁を越えて授業を見合うと言ってもやはり教科の専門性もそれぞれ高く、ともすれば縄張り意識がお互いにあるとあって、率直な意見交換が常にできていたとは言えませんでした。その後2年目は、生徒の主体性を育てるということが宮腰中心に提案され、そしてそのためには従来から続く板書を中心とした一方向的な知識伝達の授業スタイルではなく、生徒の学びを中心とした探求型の授業スタイルへと本校の授業も変換しなければならないという考えも提案され、他校での取り組みに習って授業を改革することを1つのテーマとして研究会の活動を続けてきました。その中で啓新高校では初となる研究紀要を作成す

ることが出来ました。しかしながら、授業研究会としての歴史はまだ浅く、成果と呼べるものはそれほど多くはありません。また、先述のように宮腰を中心とする教職大学院のメンバーが授業研究会を実質上牽引し、テーマや目標も提案しているという中では、他のメンバーの自発的な意見や提案も出にくく、というより全くと言っていいほど出ず、やらされ感のみで時間だけを過ごすということも少なくない状況でした。

そういった中で3年目となる本年度については、今現在の本校で必要とされているものをもう一度見つめ直し、身近なところから具体的な課題を見出すというところから研究会がスタートしました。その結果今年度の授業研究会は各メンバーが大変活発に意見を出し合い、話し合っている姿が毎回見られます。放課後の時間帯を設定しているのですが、終了予定時間を大幅

にオーバーしてでも話し合いが持たれています。部署・学年・教科・経験年数の枠を超えて、授業を良くし学校を良くするという教員協働コミュニティがあり、そのための場ができたことは大きな一歩ではないかと考えています。また、必ずしも教職大学院生がその話し合いのリーダーとなるわけでもなく、授業研究会がメンバー全体の総意で運営されていていっているという意識が芽生え始めていることも歓迎すべきことではないかと考えています。

今後、教職大学院で学ぶ内容を現在の本校に還元できるように学ぶとともに、本校の授業研究会における取り組みについても教職大学院に持ち込み、研究の話題提供の一つともなれば幸いだと考えています。

## 教師教育ネットワーク・交流のひろば

このコーナーは、全国各地で教師教育に取り組んでいる教職大学院や既設大学院等の実践と研究を交流する広場です。今号では、上越教育大学教職大学院の取り組みを紹介します。たくさんの投稿を期待しています。

### 上越教育大学教職大学院

「上越教育大学流」学校支援プロジェクト —めざせ！理論と実践の融合—

木村 吉彦

はじめに

上越教育大学教職大学院の専任スタッフ15名（研究者教員6名・実務家教員9名）の特徴は、研究業績も実務業績も共に豊富であり、本稿のサブタイトルに

掲げた「理論と実践の融合」をそれぞれが果たそうと努力してきたメンバー達であることである。

#### 1. 学校支援プロジェクトの理念

上越教育大学は、これまで「現場主義の教員養成」を推進してきた。そこでは、学校をフィールドとする臨床的研究を中核としながら、全国から多くの中堅現職教師が集まる大学院大学としての特徴を最大限に生かそうと努力してきた。この経緯に基づき、教育実習をはじめとして臨床的な研究活動に協力的な地元の公立学校及び教育委員会を中心とする97以上の施設との連携・協力により、プロフェッショナルな教員養成カリキュラムの中核をなすのが、上越教育大学教職大

学院独自のカリキュラム「学校支援プロジェクト」である。上越教育大学教職大学院が院生達に身に付けさせたい「即応力」「臨床力」「協働力」という3つの力注)は、学校現場の教育課題を解決する教育実践の過程の中でこそ、より効果的に学ぶことができる。これらの力の効果的な学びの場が「学校支援プロジェクト」である。

注)「即応力」「臨床力」「協働力」の詳細は『平成24年度 上越教育大学教職大学院案内』pp.6-9を参照してください。

## 2. 学校支援プロジェクトの実際

上越教育大学教職大学院の専任教員は、多様なテーマのプロジェクトを設定している。それらは、実習校の教育課題とリンクしたプロジェクトである。院生は、それらの中から1つのプロジェクトを選び、それを設定した専任教員の指導するチームに所属する。チームごとに実習校との事前の打ち合わせを行い、各人が「学校支援フィールドワーク」(実習科目)においてどのような活動をするのか計画を立てる。このフィールドワークでは、実習校や大学において随時、実習校教員・学卒院生・現職院生・専任教員が協議することで、実習校の教育課題解決に向けた計画を改善していく。そして院生は実習校での諸活動について省

察・評価する。この一連の活動を「学校支援リフレクション」として位置づけた。さらに、この2つの学校支援活動の成果を整理し、実習校において発表することによって、実習成果を実習校に還元する。この還元活動を「学校支援プレゼンテーション」として位置づけた。以上のように、「学校支援フィールドワーク」「学校支援リフレクション」「学校支援プレゼンテーション」によって、実践・省察・還元という一連の活動を実現している。これを「学校支援プロジェクト」と呼び、上越教育大学教職大学院のカリキュラムの中核として位置づけている。これこそが、常に「理論と実践の融合」を意識した活動である。

## 3. 学校支援プロジェクトにおける院生達の学び

### ①学卒院生の場合

第1回修了生フォローアップ研修会(2010年9月25日)でのアンケート回答から、学卒院生は学校支援プロジェクトという長期間にわたる実習体験によって、現場の実態を見聞きしながら「学校とは?」「教師の役割とは?」「そもそも教育とは?」といった根本的な課題に気付き、自分の考えを明確化する機会を得ていたことが分かる。学部時代においては対応不可能な課題発見と課題解決のプロセスに気付いてくれたと思われる。

### ②現職院生の場合

多くの場合、学卒院生と現職院生が支援チームを組んで実習を行う。そこでの現職院生はチームの指導的な役割を果たす。また支援校の課題解決に向けて重要な役割を果たすことから学校現場での若手教員を育てる立場でもある。さらには、実習校の教員と協働して学校課題を解決する過程を通じて、現任校における課題解決を今までとは違った視点で追究することのできる「引き出し」が増やせたとの声も多かった。

## おわりに

学卒院生と現職院生との学びの姿から、上越教育大学教職大学院がめざす「理論と実践の融合」がそれぞれの経験を前提としながらも果たされていることを読み取ってもらいたい。既存の大学院が追究してきた「理論研究」、学校現場で求められる「対症療法的解

決策」、どちらもそれだけでは真の学校課題解決には貢献できない。「上越教育大学流」とは、まさしくこの「理論と実践の融合」を基にした課題解決力育成の教員養成である。

# フィンランド視察を終えて

3月1日から9日までフィンランドに訪問し、小・中・高等学校や大学での取り組みを視察してきました。前号から始まった訪問記の連載、今号では「教員養成カリキュラム」、「インクルーシブ教育」といった視点から現地の取り組みを紹介いたします。

## フィンランド報告

石井 恭子

### はじめに

2011年3月1日から9日まで、ヘルシンキ大学と附属校など3つの学校を訪問し、お互いの教員養成についての交流をしてきました。「福井大学モデルによる教職専門性開発と国際共同研究ネットワークの形成」研究によるものです。本稿では、訪問の概要と、教員養成のカリキュラムの紹介をします。専任教員は長谷川先生（数学）、川上先生（理科）、木村先生（教師教育学）、笹原先生（特別支援教育）、石井（理科教育）、さらに協力教員の山田先生（理科教

育）、濱口先生（現専任教員、美術教育）という総勢7名の訪欧となりましたので、それぞれの専門に応じた訪問先を選んでいただき、授業参観と研究の交流プログラムを作っていただきました。この研究交流訪問は、昨年11月に北海道大学で行われた国際セミナーにおいて、ヘルシンキ大学のJari Lavonen教授とお会いし、福井大学の教職大学院に興味を持っていただいたことがきっかけで実現しました。

3月1日(火)	16:00-18:00	ヘルシンキ大学	ヘルシンキ大学の教員養成カリキュラム
2日(水)	9:00-14:00	ノーマルリセ Helsinki Normal Lyceum	附属校と教育実習について 授業参観（7年生美術/高校2年生物理）
3日(木)	9:30-15:00	コラメンスタリESPO市の改革学校 Koulumestarin koulu	改革学校と特別支援統合教育について 授業参観（3年数学・2年音楽・4年英語）
4日(金)	9:00-14:00	ビッキ附属校 Viikki Teacher Training School	教員養成カリキュラムについて 授業参観（1年音楽・4年英語・高校数学）
7日(月)	9:00-12:00	ヘルシンキ大学	教育セミナー（福井大・ヘルシンキ大）
	13:00-16:00	経済センター Economical Information Office	フィンランドの社会状況と教育について
8日(火)	9:00-12:00 13:00-16:00	ヘルシンキ大学LUMAセンター LUMA-Center	物理教育について 化学授業参観と現職教育について

### ヘルシンキ大学教員養成カリキュラムの概要

まず、ヘルシンキ大学における5年間の教員養成カリキュラムを紹介します。小学校学級担任の教員資格と、中等学校教科教育の教員資格のコースが独立しており、どちらも3年間の学部と2年間の修士課程合わせて5年間で300単位（ECTS：1ECTSは30時間の学修）が課されています。これは、フィンランドに限らず、ボローニャプロセスに参加しているヨーロッパ各国で共通に決められたものです。小学校

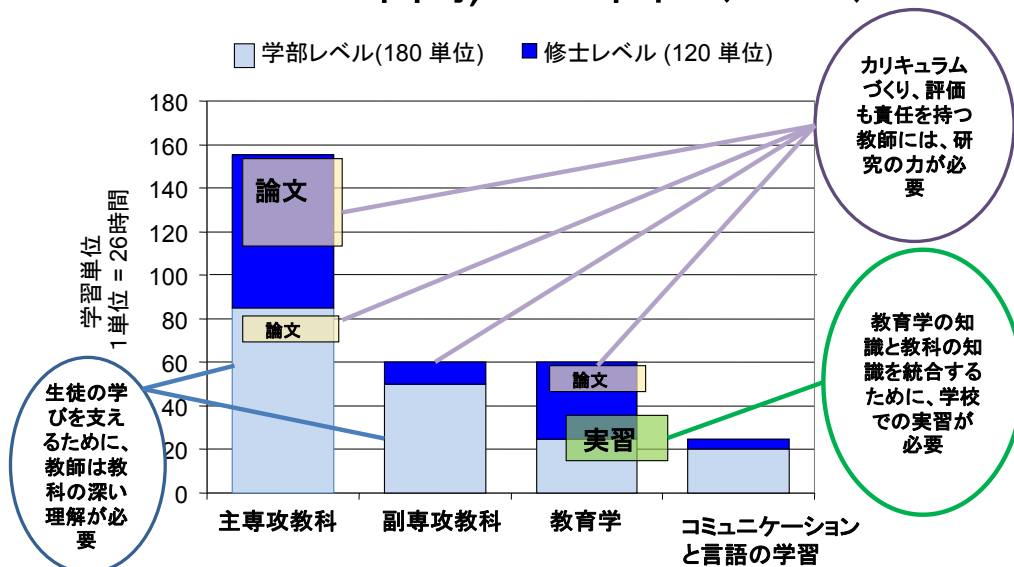
学級担任のコースは主に教育学部で、中等学校教科教育のコースは、それぞれの専門学部と教育学部の協同によってカリキュラムが作られています。

中等教育教科教育の教員養成では、物理+数学、物理+化学、母国語+英語、などというように、2つの教科の教員資格を取ることが原則となっています。生徒の学習を支えるためには、専門教科の深い理解は不可欠であることから、学部3年間180単位のうち半

数以上が、主専攻教科（80単位）と副専攻教科（50単位）の学習です。また、教師の専門性として、教育学とリンクさせたPCK（Pedagogical Content Knowledge=授業を想定した教科内容の知識）が重要であることから、教育学60単位の中には、3回の教育

実習を含みます。さらに、研究に基づいたカリキュラムづくりや評価など、教師の責任がとても大きく、教科内容や教育学に関する研究も重視されていることから、研究に基づいた教科教育学を学び、5年間で約3つの論文を書きます。

## 中等学校教員養成カリキュラム : 3 + 2 年間, 300単位(ECTS)



ヘルシンキ大学中等教育教科カリキュラム (Jari Lavonen教授作成の図を著者が訳したもの)

## フィンランドにみるインクルーシブ教育

笹原 未来

### はじめに

フィンランドは教育先進国、福祉国家、そしてインクルージョン先進国として知られている。今回訪問した学校の1つであるKoulumestarin小学校は、フィンランドの中でもインクルージョンに力を入れている公立の小学校だった。フィンランドにおけるインクルージョンの実現形態とはどのようなものなのか、そこに日

本におけるインクルーシブ教育の展開の可能性を見出すことができるのか、そうした思いを胸に学校を訪問した。ここでは、Koulumestarin小学校の取り組みの一端を紹介し、向かうべきインクルーシブ教育の方向性を探ってみたいと思う。

### インクルージョンと学校教育

この学校では、かつて1学年に1クラスあった特別支援学級を解体し、全ての子どもが通常学級で学んでいた。そして、そうしたインクルーシブ教育を実現するために、この学校ではいくつかの画期的な取り組みが行なわれていた。一つ目は、チーム・ティーチング

(T.T) による学級運営である。この学校では、全てのクラスが、通常学級担任と特別支援教諭とのT.Tで運営されている。クラスでは、通常学級担任、特別支援教諭、そして支援員という複数のスタッフが協働してクラス全体を見ており、教員は、スペシャルニーズの



無にかかわらず、その時々で支援が必要な子どものフォローにつく。こうした形態は、理念としてのインクルージョンを実現しようとして生み出されたものではない。学校の抱える課題（一人で大勢の子どもを見るのが難しいという課題を抱える通常学級担任と、一人で6人もの子どもを見るのが難しいという課題を抱える特別支援学級担任）を解決し、よりよい学習環境を実現するための方策として、T.Tによるインクルーシブ教育にいきついたとのことであった。つまり、この学校のインクルーシブ教育は、特別支援教育の枠にとどまらない、まさに学校改革の取り組みなのである。

この学校におけるインクルーシブ教育を支えているもう一つの重要なポイントは、授業形態にある。この学校では、誰がスペシャルニーズのある子どもか、教員と保護者以外は知らず、子ども達も違和感なくなじんでいると言う。目立たないからだ。目立たないからなじめる、それで良いのか、そこには議論の余地があると思うが、授業を見てみると、確かに目立たない。一斉授業のような形態をとっていないためである。



英語の授業場面。子ども達はそれぞれ自らの課題に取り組んでいる。教室でやる子もいれば、図書室でやる子もいる。一つ目の課題が終われば、隣の教室や図書室の隅に置かれたパソコンの前に移動して次の課題に取り組む。子ども達はそれぞれ自分のペースで学ぶことが保障されており、他の子どもと足並みをそろえる必要がない。先生方は、子ども達の様子を見て回りながら、子ども達に声をかけていく。相談をしながら課題に向かう子ども達がいる一方で、ざわついた環境が苦手なのだろうか、パソコンに向かう子どもの中にはヘッドフォンをつけている子どももいる。場合によっては、クラスを半分に分けて、少人数で授業をすることもするという。実際、音楽の授業では、クラスを半分に分け、十数人の子どもが車座になって楽器を



弾いていた。残りの半分の子ども達は、隣で算数の授業をしていた。また、この学校では、プロジェクト型の学習を取り入れ、子ども同士の学び合いに重点を置いているという。分かる子どもが分からない子どもに教えることは、教える子どもにとっても大きな学びとなる。また、発達障害のある子どもであっても、芸術のような授業では、他の子ども達が思いつかないような作品を作ったりして、一目置かれることがある。教員達はインクルーシブ教育の成果をそう口にした。インクルーシブ教育を、障害のある子どものためのものとしてではなく、障害の有無にかかわらず、子ども同士の相互育ちが実現する教育として捉えていることが印象的だった。

こうしたT.Tによる学級運営や柔軟な授業設計を可能にしているのが、教員の協働である。この学校では、T.Tによるクラス運営、授業設計を支えるための話し合いの時間が、勤務時間内にきちんと位置づけられている。こうした教員たちの協働が、子どもたちの学びを支えているといえる。ただし、この学校のこうした学校改革の取り組みは決して容易なものではなかったようだ。

フィンランドには、授業研究や授業公開といった習慣がない。他の学校を見学した際には、「教員を信頼（trust）しているので、彼らの授業を見に行っただことは一度もない」と胸を張って言う管理職にも出会った。しばしばこの「trust」という言葉を耳にしたが、フィンランドでは教員に対する“trust”，教員の自主性を基盤とした分業化がなされており、日本で言うところの「協働」の文化はあまりないように感じられた。こうした背景を有する国にあって、この学校の取り組みは決して容易なものではなかっただろう。この学校の取り組みが、フィンランドにおいてもかなり先進的であることも、そうしたことを物語っているように思う。「フィンランドだからできる」というものではないのだ。そのことに勇気づけられるような気がし

た。フィンランドは教育先進国、福祉国家、そしてインクルージョン先進国として知られている。今回訪問した学校の1つであるKoulumestarin小学校は、フィンランドの中でもインクルージョンに力を入れている公立の小学校だった。フィンランドにおけるインクルージョンの実現形態とはどのようなものなのか、そこに日

本におけるインクルーシブ教育の展開の可能性を見出すことができるのか、そうした思いを胸に学校を訪問した。ここでは、Koulumestarin小学校の取り組みの一端を紹介し、向かうべきインクルーシブ教育の方向性を探ってみたいと思う。

### 学校内の風景から

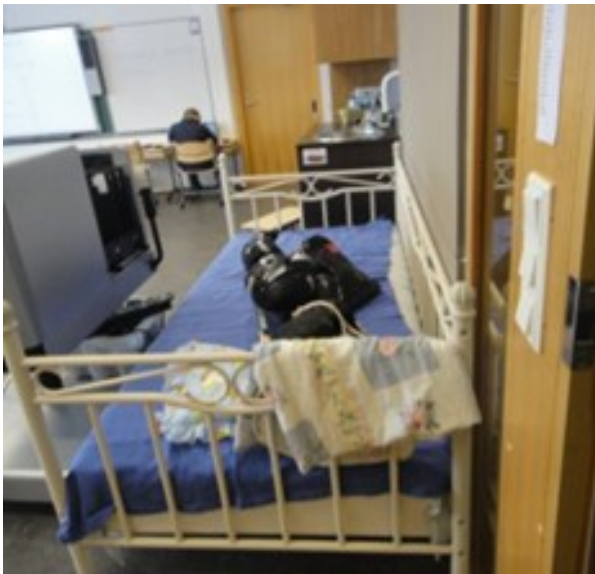
学校内を案内してもらって歩いていると、この学校の環境が、子ども達にとってとても優しいものであることに気がつく。教室にはベッドが置かれている。子ども（時には教師も）が休んだり、ゆっくりと絵本を読んだり、リラックスできるようにと置かれている。教室に、安心してくつろげる場所が確保されている。それは、そのことを大事だと思っているからこそ実現できることだ。

子ども達の机には、溝がある。こういう溝が一つあるだけで、授業中に鉛筆や消しゴムが転がってどこかに行ってしまうという事態を防げるだろう。

併設する幼稚園の出入口付近には、洋服が描かれた絵カードが貼られていた。外で遊ぶ時はこれを身につけて行った方がいいよ、ということらしい。こういっ

たカードは、学校内の至るところに用意されていた。

これらの物が、障害のある子どもたちのために用意されたものなのかどうかは分からない。ただ、障害の有無にかかわらず、子ども達みんなに優しいことは確かだ。



### おわりに

障害のある人とない人が共に暮らす共生社会の実現に向けて歩みを進めている我が国において、何らかの障害のある児童生徒を含めた授業づくり、学級づくりを行なう力量は、特別支援教育を担当する教員のみならず、多くの教員に求められるものである。また、障害のある子どもにとっての分かりやすい授業とは、障害のない子どもにとっても一層分かりやすい授業であ

ることを意味する。つまり、通常学級における特別支援教育の取り組みは、何らかの障害を抱える子どもへの支援、個への支援に留まらず、全ての子どもの学びを保障する授業改革、学校改革への展開の方向性を有しているといえる。フィンランドで大きな一歩を踏み出しているこの学校の取り組みの中に、そうした授業改革、学校改革の展開の可能性を見たように思う。

# 6/3 Fri. 9:00-16:30 第46回 教育研究集会

## 福井大学教育地域科学部附属中学校

### 学びを拓く<<探究するコミュニティ>> (4年次)

#### — 学びの必然性を問う —

福井大学教育地域科学部附属中学校では「探究」と「コミュニケーション」をキーワードとして、子どもも教師もが学び合う「探究するコミュニティ」の実現に向けた研究を進めてきました。これからさらにこの「探究するコミュニティ」の在り方を模索し、より質の高い学校文化へ高めていこうと考えております。今年度は、子どもの学びをどう見取るかに視点をあて、テーマの解明に迫ります。

#### 日 程

8:30	9:00	9:20	9:40	10:30	10:50	11:40	12:40	14:00	14:20	14:50	15:00	16:30
受付	オリエンテーション	移動	公開授業Ⅰ	休憩	公開授業Ⅱ	昼食	分科会	移動	全体会	休憩	シンポジウム	

#### シンポジウム

##### 子どもたちの探究を支える教師の探究とは

- 鹿毛 雅治先生 (慶応義塾大学教職課程センター 教授)
- 荒瀬 克己先生 (京都市立堀川高等学校 校長)

本校の授業における子どもの実態から学びを読み解き、授業実践者の振り返りを支えてくださっている鹿毛雅治先生。平成11年、公立の高等学校において「探究科」を新たに新設し、学校改革に挑戦し続ける堀川高校荒瀬克己校長先生。お二人をお迎えし、子どもたちの探究の展開、それを支える教師の協働探究のあり方、そしてその相互性について、本校の実践も含めていっしょに考えていきたいと思っております。

#### 申込方法

- 2011年5月30日までに、申込用紙を郵送またはファックスでお送りください。  
(申込方法や交通機関の詳細は、<http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzoku-j/>をご参照ください。)
- 参加費は2,000円です。
- 問い合わせ先

〒910-0015 福井市二の宮4-45-1

福井大学教育地域科学部附属中学校 教育研究集会受付係

Tel: 0776-22-6985 Fax: 0776-22-6703

6月ラウンドテーブル速報

# 実践し 省察する コミュニティ

Fukui Round Tables Summer Sessions 2011  
For Reflective Practice, Organizational Learning,  
and Reflective Institutions

2011.6.25-26  
福井大学共用講義棟

主催：福井大学大学院教育学研究科  
教職開発専攻／教職大学院

6/25 Sat. 13:00-17:00

専門職として学び合う  
コミュニティ

3つの領域ごとに、専門職としての実践力を培う学びをどう実現していくか、それぞれの職場・地域・大学での取り組みをふまえて語り合います。

session 0 ラウンドテーブルの意味と構成

session 1 実践に学び合う広場 実践の広がりに出会う

session 2 問題提起 方向性を探る

session 3 テーマ別の話し合い 問いを深める

zone A 学校：新しい時代の学びを拓く／学校拠点の実践研究

zone B 教師：教師の力量形成を支える／教師教育改革の実践

zone C コミュニティ：職場と地域の学び合うコミュニティ

6/26 Sun. 8:30-14:00

実践研究福井  
ラウンドテーブル2011

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

実践記録を土台に、小グループで実践の歩みをじっくり語っていきます。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えること。語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきます。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になります。1つの報告に1時間から1時間20分程度です。（報告・話し合い含む）

参加申し込みの方法は、福井大学教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご覧ください。受付は、ホームページから申込書式をダウンロードし、必要事項を記入の上、メールで送っていただく形で行います。あわせて、6月26日のラウンドテーブルの実践報告者を募集しています。申込の際にお知らせください。

## Schedule

5/21 sat 合同カンファレンス (9:30-12:30)

6/3 fri 附属中研究集会

5/28 sat 合同カンファレンス予備 (9:30-12:30)

6/25 sat -26 sun 実践研究福井ラウンドテーブル

[編集後記] 新緑がまぶしく映える季節を迎えました。今号は、内田教育長から教職大学院の取り組みについて意義づけさせていただくとともに、院生の方々から4月の合同カンファレンスの感想を寄せていただきました。また、多くの方々に原稿を執筆いただき、各紹介・訪問記も非常に充実いたしました。このNewsletterが皆様のつながりを深め広げると同時に、実践と省察のサイクルを活性化する媒体の1つとなることを願っております。（杉山晋平）

教職大学院Newsletter No.32

2011.05.21発行

2011.05.21印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp